



TITLE:

追悼 名越誠先生のご逝去を悼む

AUTHOR(S):

森, 誠一; 渡辺, 勝敏

CITATION:

森, 誠一 ...[et al]. 追悼 名越誠先生のご逝去を悼む. 魚類学雑誌 2017, 64: 231-232

ISSUE DATE:

2017-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/250231>

RIGHT:

© 2017 The Ichthyological Society of Japan; 許諾条件に基づいて掲載しています。; 許諾条件により一部非表示の箇所があります。

魚類学雑誌 64(2):231-232
2017 年 11 月 25 日発行

追悼

名越 誠先生のご逝去を悼む

我が国における魚類生態学の草創期を担い、その後も継続的に多くの重要な業績を残された名越 誠先生が、2017 年 5 月 27 日に臓機能不全でご逝去された。同年 1 月に硬膜下血腫で入院され、約 4 カ月の闘病生活を経たのちのご逝去であった。

名越先生は 1936 年（昭和 11 年）7 月 18 日、岡山県新見市で生まれ、幼少期には近隣の山や川で遊び、戦中・戦後の食糧難時代には山の幸や川の幸を収穫して過ごされたという。こうした体験は、先生の研究者としての探究心や自然観を根源的に育成したことだろう。名越先生は、投網や手掴み（！）など魚採りの名人であり、先生が捕獲調査した後は魚がいなくなるとまでいわれた。これは何度も野外調査に同道させていただいた者として強烈な実感である。また、軽装に膝まくりで溪流に何の躊躇なく入っていく野趣溢れる逞しさも、故郷で培われた体験の現れであるかもしれない。

名越先生は 1955 年に愛媛大学文学部理学科に入学し、伊藤猛夫教授の指導を受けた後、1960 年に京都大学大学院理学研究科に進学された。同大では動物学科生態学講座の宮地傳三郎教授、同大津臨湖実験所の森 主一教授らに師事し、河川生態研究グループの一員として当時助手であった川那部浩哉博士らを直接の先達として、オイカワ、カワムツ等の淡水魚の生態研究を開始した。さらに続いて、琵琶湖生物資源調査団（BST）の一員として琵琶湖に深く関わることになり、イサザやゲンゴロウブナ、ビワマスなどの個体群生態学的研究に加え、数多くの研究成果を生み出された。特に後年まで続けられることになったイサザの長期研究とその標本の収集・蓄積はこの時期に始められたものである。また、野外研究に伴って、琵琶湖周辺をはじめとする各地域の食材にも深く関心をもたれ、同じ食卓を囲む際にはよく蘊蓄を楽しくいただいたものであった。

博士課程を単位取得退学後、1965 年に三重県立大学水産学部（現・三重大学生物資源学部）に赴任され、グッピーを用いた密度効果とサイズ順位制に関する実験的研究を進められた。この実験的研究とイサザの野外研究をもとにした博士論文「魚類の成長におよぼす size hierarchy の影響についての研究」（英文）により、1968 年に京都大学より理学博士を授与された。その後、伊勢湾のイカナゴや三重大学演習林でのアマゴの長期研究を始められ、さらには、タンガニイカ湖のシクリッドの野外研究グループにも主導的な立場で加わり、それらに関する多くの業績を上げるとともに、幾人もの後進を育成された。名越先生はまた、特に東海地方における希少淡水魚の保全に関しても尽力され、関連する行政委員など

も務めながら、ネコギギ、ハリヨ、キリクチ（紀伊半島のイワナ）などの保全の礎を築かれた。

研究室では、ご自身でイサザなどを計測する姿をよくお見かけした。その計測作業は、決まった帰宅時間がくるとピタッと止められ、哲学者カントのような正確さであった。それは集中と切り替えの徹底さにほかならず、また現場主義と多量のデータに裏付けられた、「継続は力」を重視する研究スタイルゆえであったと思われる。長い会議や方向性の定まらない延々とした議論を嫌い、研究や大学運営等に関してお話をうかがうときには、聡明で潔い合理性を何度も感じたものであった。

1988 年に奈良女子大学理学部へ転任されたが、研究スタイルは変わることなく、キリクチなどのフィールドに学生らとよく出かけられた。2000 年 3 月に退官された後は同大学名誉教授となられ、私立大学教授や環境コンサルタント会社技術顧問を経て、2005 年の退職後は晴耕雨読の日々を過ごされていたとのことであった。ときどき我々のキリクチ調査などにもご同行いただき、紀伊山中の清冽な空気の中、研究その他に関してさまざまなアドバイスをいただいたことは、本当に贅沢で得難い経験であった。また、この頃から蜜蜂に興味を持たれ、ご自宅の庭で養蜂を始められ、毎日巣箱近くで行動を観察しながら、自然の恵みを享受されていたと聞く。

最後に、名越先生との多くの思い出のうちで、今も深く脳裏に刻まれている情景に触れておきたい。2000 年の退官記念祝賀会を取り仕切った直後に、若くして逝ってしまった先生の高弟である中野 繁氏に関することである。存命であれば、現在の魚類生態学を一身に背負っているに違いない彼が不慮の事故死をしてから、初めて先生にお会いした際、先生は少し俯き加減で涙を堪えるように、しばらく話をされなかった。その姿に、ありえない出来事を受け入れることができない、先生の深い心痛を肌で感じたことを思い出す。学部初年度から先生の研究室に出入りしていた中野氏が、世界的に影響力のある生態学的研究をいっそう展開しようとする矢先の不幸

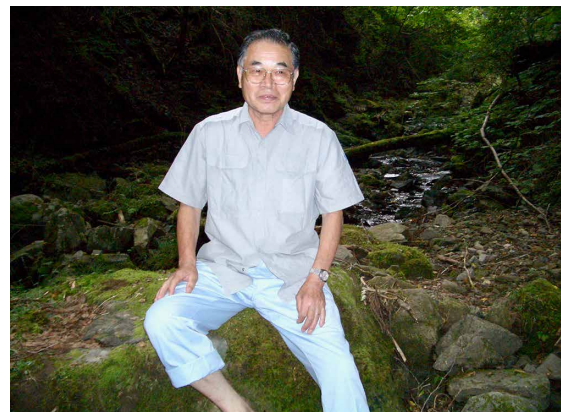


写真 1. 2005 年 8 月、奈良県野迫川村のキリクチのフィールドにて。

であり、その飛躍を何よりも楽しみにされていた先生のお気持ちを察するには余りあるものがあった。

名越先生は、ことさらに情を表にあらわさない方であったが、陰に日向に後進のことに気を配り、折々に力強く、進路、研究、保全に関して効果的な指針を示してくださった。控えめで恩着せがましさをまったく感じさせないばかりに、われわれは、先生が亡くなられてから、改めてその大きな足跡や影響に一段と強い思いを馳せるものである。ご教示を受けるべきことがまだまだあったのに、本当に残念である。心より感謝し、ご冥福をお祈り申し上げる。

(森 誠一 Seichi Mori：〒503-8550 岐阜県大垣市北方町5-50 岐阜経済大学地域連携推進センター e-mail: smori@gifu-keizai.ac.jp；渡辺勝敏 Katsutoshi Watanabe：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 e-mail: watanak@terra.zool.kyoto-u.ac.jp)
